ウガンダ共和国の地誌

―稲作の普及を中心に―

山形県立長井高等学校　　金田啓珠

◎基礎データ

【一般事情】

(1)地形	アフリカ大陸の中央部、ヴィクトリア湖（1,134m）の北岸に位置する、赤道直下の内陸国。ナイル川の源流が国土を縦断し肥沃な土地がひろがる。 （※東アフリカ大地溝帯の中央部に位置し、ホワイトハイランドの一部をなす）
(2)気候	赤道直下で熱帯気候（Ａｗ）に属しているが、標高が高く平均気温は 21～23℃としのぎやすい。北部は３月～６月の雨期を除いて激しく乾燥。ヴィクトリア湖の影響を受ける南部では乾季がみられない。
(3)面積	24.1 万ｋ㎡（ほぼ本州大）
(4)人口	3,190.2 万人（2008 年）
(5)首都	カンパラ（人口'08）148.0 万人
(6)民族	バガンダ族（バンツー系）、ランゴ族・アチョレ族・ニャンコレ族（ナイル系）など
(7)言語	英語（公用語）、ルガンダ語、スワヒリ語
(8)宗教	キリスト教 85.3%（カトリック 41.9%、聖公会 35.9%など） イスラム教 12.1% 伝統信仰 1.0%

【経済】

①国民総所得（GNI）	117 億ドル（2007 年、世銀）
１人当たり GNI	370 ドル（2007 年、世銀）
②経済成長率	7.9%（2007 年、世銀）
③主要貿易品目	輸出：鮮魚、コーヒー、紅茶、綿花（2005 年） 輸入：電化製品、穀物化学製品、石油・石油製品（2005 年）
④主要貿易相手国・地域	輸出（07）：EU（24.3%）、ア首連（13.3%）、スーダン（11.8%）、コンゴ（7.5%） 輸入（07）：ＥＵ（20.6%）、ケニア（13.5%）、ア首連（12.0%）、インド（9.9%）、中国（7.9%）
⑤通貨	ウガンダ＝シリング（U.shs）

出典：「2009 データブックオブ・ザ・ワールド」
外務省ホームページ

◎各自調べたい項目

（１）ウガンダにおける稲作の普及について

アフリカでコメを通じて「緑の革命」の実現に向けての動きがあるという。アフリカでは人口増加にともなう食糧生産が緊急課題である。また、かんばつなど自然災害や砂漠化の進行などにより、農作物の生産量は不安定である。さらに長い間の植民地政策により、いまだに農作物の生産は、自給的作物よりも商業的作物中心のモノカルチャー経済の国が多く、大量の農作物を輸入に依存しているのがアフリカ諸国の実情であるためだ。では、現在どのようにコメを中心にした「緑の革命」がすすめられているのだろうか。

そのひとつが、アフリカ緑の革命のための同盟（AGURA）と国際協力機構（JICA）が共同で立ち上げた「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD)」であり、コメ生産倍増計画を目的としている。サブサハラ・アフリカ（サハラ砂漠以南）では近年、穀物の中でも米が都市部を中心に消費量が増え、不足分を大量の輸入で補っている。アフリカの主食として、キャッサバなどのイモ類や小麦などが知られおり、米を生産する国は、マダガスカル、エジプト、ナイジュエリア、ガーナ、ウガンダなど特定の国に集中しているのが現状であるが、稲作は確実に広がりつつある。

また、ウガンダにおけるネリカ米の導入が、貧困農家の所得向上につながっている。コメはタバコやコーヒーといった換金作物とは異なり、自家消費することも可能であるため、農家レベルの食糧確保といった観点からも重要である。

このように、アフリカでの食糧増産と自給率の向上のために緑の革命は、稲作の普及と日本の稲作技術の支援など、実現に向けて確実に動いている。そして、アジアの稲作における技術協力といった南南協力の点も重要である。

＜アフリカの米事情＞

①ネリカ米について

ウガンダで注目されているネリカ米は、コメの新しい品種である。「ネリカ」とは「New Rice for Africa（アフリカのための新しい米）の文字をとったもので、従来不可能といわれたアフリカ種とアジア種の稲を交雑して作られた、病害虫に強く、収量も多いという品種である。開発したのはコートジボワールにある「西アフリカ稲開発研究協会」の研究者で、1996 年に実用品種の育成に成功した。その後、西アフリカのギニア、ガンビア、マリなどの国々から東アフリカのケニア、エチオピアまで栽培が始められた。ウガンダもそのひとつで、首都のカンパラ郊外にあるナムロンゲ農業試験場では、日本人専門家によるネリカ米栽培の技術指導が行われており、周辺のエチオピアやジンバブエの農業指導者も研修に来るという。

ネリカ米は陸稲で、農家の庭先から畑の中までどこでも育つ強さを持つ上に、草丈が高いので、穂刈がしやすく、生育日数も短いという長所があるが、必ず 5 日間の 20 ㎜以上の雨量が必要という条件もある。ウガンダの主食はバナナ（「マトケ」といい、蒸してすりつぶして食べる)、トウモロコシ（「ポショ」といい、粉にしたものを蒸して食べる)、キャッサバなどのイモ類が中心であったが、ネリカ米の登場により、人々にとって高価であった米がより身近になり、その販売によって農家の所得向上の可能性も出てきた。

ネリカ米は、ウガンダの他、タンザニアやガーナなどに普及しつつある。

②アフリカのコメ生産倍増に向けた「CARD イニシアティヴ」について

「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD)」の目標 **10 年間（2008～2017 年）でサブサハラアフリカにおけるコメの生産量を、現在の 1,400 万トンから 2,800 万トンに倍増することを目標とする。**

2008 年５月に横浜で行われた「第４回アフリカ開発会議（TICAD Ⅳ)」のサイドイベントにおいて発表された。このイベントには、多くの国の農業専門家、研究者、援助関係者、政府関係者が参加した。

③アフリカの「緑の革命」とアジアの「緑の革命」の経験

コメはアジアの主食であり、アジア諸国は長年にわたる稲作の経験と知識を蓄積している。また、アジアにおいては、1960 年代から 1980 年代にかけ、稲作を中心に「緑の革命」が進展し、コメは同地域の食料確保に大きく寄与した。この「緑の革命」においては、品種改良、肥料の使用拡大、灌漑施設の整備等を通じた土地の生産性向上が生産増大の決定的な要因となった。

アフリカ域内においては、主要食用作物の生産量・消費量とも増加しつつある。キャッサバは生産量が需要を上回っているが、近年消費の拡大が著しいコメ・コムギに関しては、消費の伸びに生産増が追いつかず、アジア、北米等からの輸入が年々拡大する傾向にある。現在の自給率は、コメで 60%前後、コムギで 30%程度にとどまっている。コメは、年間 700 万トン前後を輸入しており、これには多額の外貨が使われている。

アフリカ「緑の革命」実現のための課題 ① 農業政策　②研究能力強化　③品種改良と種子生産　④農地開発と農業用水の確保 ⑤農業普及の強化　⑥営農資金へのアクセス拡大　⑦改良種子、肥料、農業資機材の確保・利用改善 ⑧収穫後処理とマーケット

出典：「アフリカ稲作普及のための共同体」イニシアティブ本文より抜粋

（２）　日本とウガンダとの関係（貿易品を中心に）

①日本の対ウガンダ貿易（07）

輸出 147 億円（乗用車 30.9%、バスとトラック 28.3%、鉄鋼 25.0%、オートバイ 5.4%、
一般機械 3.0%）

輸入 12 億 5,172 万円（コバルトと銅製品 44.1%、冷凍した魚 22.3%、ごま 16.0%、
綿花 4.9%、コーヒー生豆 4.2%）

②ウガンダの日本製中古自動車の多さ

③「ナイルパーチ」・・・巨大魚であるため、冷凍の切り身が輸入され、ハンバーガーショップやファミリーレストランに登場。日本人にとって身近な食材。

④コーヒーは缶コーヒーの原料となっている。

（３）　ウガンダにおける都市問題
～深刻な大気汚染と交通事故～

ウガンダにおける深刻な大気汚染の問題については、多くの発展途上国と同様である。ウガンダにおける大気汚染は次の四つの原因が考えられる。

①多くの日本製の中古車やバイクが輸入され使用されているが、車検制度もなく整備が行き届いていない。

②混合ガソリンのため、排気ガスがひどい。

③車やバイクが走ることで赤土の土ぼこりが舞い上がる。

④東アフリカ大地溝帯の中央部に首都のカンパラは位置するため、盆地状のカンパラ周辺に汚染した大気がたまりやすい。

ウガンダの人びとはマスクなどで口や鼻を覆ってはいないが、呼吸器への悪影響が懸念される。